

埋蔵文化財特集

地下からみた鉾山町

足元にある
歴史

↑ 江戸時代後期の相川

「佐渡国海岸図」抜粋、
天保13年(1842)、石井文海筆

← 相川での発掘作業

地面の下には
何がある？
鉾山町の
遺跡を発掘!!相川
あいかわらばん
瓦版

第32号

2018年3月23日発行

《編集・発行》

佐渡市産業観光部

世界遺産推進課

電話 0259-63-5136

FAX 0259-63-6130

鉾山町は、実際には

どんな姿をしていた？

江戸時代の相川は、どのような場所だったのでしょうか。当然ですが、タイムスリップでもしない限り、実際の鉾山町を目にすることはできません。

一方、現在まで残されている江戸時代の相川の町絵図には川や道、社寺、町家などが描かれており、そこから当時の様子を想像することが出来ます。

そして、もうひとつ、江戸時代の相川を知る方法があります。それが、今の相川市街地の下に眠る、鉾山町の遺跡です。

私たちの足元には
江戸時代の遺跡が眠る

目には見えませんが、相川の地下、つまり、私たちの足元には、江戸時代の鉾山町の遺跡が広範囲にわたって存在します。「佐渡金山遺跡」という名称の埋蔵文化財で、山手の鉾山から、上町・下町を含む町場がその範囲に含まれます。佐渡市では、そうした地下にある遺跡の発掘調査もおこなっています。今号では、相川市街地における発掘調査の成果の一部をご紹介します！

発掘によって確認された遺跡と絵図資料を照らし合わせることで、江戸時代の相川がより鮮明に浮き上がってきました。

くわしくは
2・3面！

埋蔵文化財特集



コンクリート製の蓋には鉱山のトロッコレールが再利用されていた!



蓋を取ってみると湧きだした水が見える。
井戸としては現役バリバリ。

水が湧きだし、今も使用できそうな井戸です。
深さは7m以上あります。

井戸の上には、鉱山のトロッコレールを再利用したとされる、コンクリートの蓋がかぶさっています。
近代まで井戸が使われていたことがうかがえます。

側面の石は、相川の吹上海岸で切り出されたと推測されます。

この井戸が発掘された車道は、江戸時代には「藤沢小路」と呼ばれ、後に拡幅されました。もともとは小路脇の屋敷地にあった井戸だと思われる。



現在の写真。このあたりで井戸が確認され、発掘調査後に埋め戻された。

発掘調査からみえてきた、かつての相川。
アスファルトに埋もれていた井戸を発見！
江戸時代の道幅は今より少しせまい。

通りに沿って並ぶ石垣が、上町の地下で多数確認されています。こうした石垣は宅地と道の境界であり、現在の車道よりも内側に築かれていることが多いです。

江戸時代の道幅は今よりも少しせまかったようです。



車道の下から発掘された石垣(大工町):いつの時代のものか不明だが、近世の鉱山で使われた石臼や扣石が石垣に再利用されている。



車道の下から発掘された石垣(下京町):長さ21.5mの石垣が残存する。場所によってまちまちだが、石垣の高さは最高約1m。付近では井戸も確認されている。





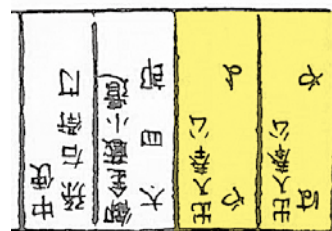
出入奉公
やよさん宅

出入奉公
はやさん宅

ある1つの敷地を発掘したところ、江戸時代に形成されたと思われる2つの敷地が現れました。「相川町墨引」という文政9年(1826)の資料をみると、その頃には出入奉公をしていた「やよ」と「はや」という名の人が、2つの敷地にそれぞれ居住していたことがわかります。

また、相川市街地は江戸時代に複数回、大火に遭っていますが、発掘では、そうした大火の発生を示す火災層も地中に確認できました。火災層の数から、この辺りは少なくとも3回の火災被害に遭っていたこともわかりました。

米屋町境



目+路里間一

南

北

相川町墨引、文政9年(1826) 抜粋

各戸の居住者の名前と職業が記されている。おおよその敷地配置も読み取ることができる。

出典『佐渡相川の歴史資料集5付録』相川町史編纂委員会

江戸時代の相川に暮らした人の数や名前は、資料を通して知ることができますが、その情報は真実なのか、資料だけでは判断できません。

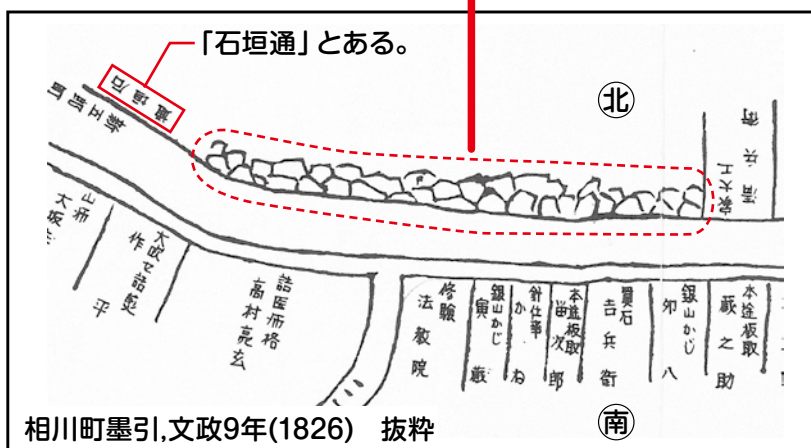
発掘調査によって、そうした歴史資料を裏付ける物的証拠が発見されました。



地中に確認された石垣



発掘調査の様子(発掘には重機を用いることもあります)



相川町墨引、文政9年(1826) 抜粋

文政9年(1826)の墨引に描かれた石垣が、現在のほぼ同じ場所から発掘されました。

石垣は地表から約50cmの深さにあり、その付近で陶器1点、土器3点も出土しました。石垣の年代は18世紀～19世紀前半頃と思われ、年代からみても文政9年の墨引にある石垣が、発掘された石垣と一致します。

江戸時代の敷地がそのまま残る。

江戸時代の絵図に描かれた石垣は実在した！



四町目の通りから見た弾誓寺

相川の今昔

「弾誓寺」

相川四町目の通りの中ほどで、山側にのびる横道、弾誓寺の参道です。参道は途中で石段になり、石段を上った先に本堂の大きな瓦屋根が顔を覗かせています。

江戸時代中期から後期にかけての文献『佐渡四民風俗』に記された、ある老人の話に弾誓寺が登場します。かつて、弾誓寺の下に岩山があり、老人が少年の頃はそ岩山で魚釣りをしたといひます。この話から、江戸時代前期の弾誓寺には海がせまっていたことがうかがえます。

弾誓寺の開基は寛永13年（1636）、本尊は阿弥陀如来座像であり、当時としては稀な大きな仏像であったので「大仏（おおほとけ・おほとけ）」の名で知られたそうです。付近を流れる川も「大仏川」といひます。大仏は江戸時代後期に火災で焼失しましたが、その名は今も残り、檀家のある人は、寺のことを「おほとけさん」と親しみを込めて呼びます。

江戸時代、百姓らが奉行所へ訴え出る前、弾誓寺境内で寄合ひを開くのが習わしでした。また、逃亡した鋤夫の駆込み寺でもあったように、鋤山町の人々の心の拠りどころとなっていたようです。

「花粉の季節がやってきた」

今年もとうとうやってきました。とくに厳しかった冬が終わり、春の訪れるのは嬉しいのですが、辛い人にとっては本当に辛い時期です。にゃんじーも止まらない鼻水に悩まされています。



第33号の予告

◆活動報告 ほか

次回5月25日
刊行予定